

二重目的語構文における所有関係再考

—形式と意味との対応関係—

登田 龍彦

Possession in the double object construction revisited:

The relation between form and meaning

Tatsuhiko Toda

(Received September 29, 2017)

1. はじめに

本稿は、二重目的語構文の間接目的語指示物と直接目的語指示物間における所有関係について考察し、動詞の意味が構文を含む文の意味を決定する際に重要な役割を果たすことを指摘しつつ、Bolinger (1977) の形式と意味との一対一の対応原理の捉え方について議論する。¹ 本稿で議論の対象とする文は、動詞の直後に名詞句が二つ連続して、二重目的語構文と分析できる (1) に示すものである。

- (1) a. Brenda gave John the car for a week. (Harley and Jung (2015:704))
b. He wrote his lawyer a note.
c. She made him a good wife.
d. He kissed her goodbye.

急いで付言すると、(1a) と (1b) はこれまで紛れもなく典型的に二重目的語構文に生起すると考えられている動詞 give と write が生起しているのに対して、(1c) では動詞 become と類似した意味「なる」を表す動詞 make が生起していること、(1d) では動詞 kiss が間接目的語というよりはむしろ直接目的語として her を取っていることから、通常の二重目的語構文として分析するのがふさわしいかどうかは意見の分かれるところである。本稿では、(1a) における John と the car の間に見られる一週間の「所有関係」(Harley and Jung (2015:704) 参照) 及び (1b) における his lawyer と a note の間にみられる「所有関係」が、(1c, d) においても him と a good wife の間及び her と goodbye の間にも成り立ち得ると仮定した登田 (2016) 及び登田 (2006) に基づいて、これらの構文に関する形式と意味との対応関係を捉え直そうとするものである。本稿でいう「所有関係」とは、抽象的な意味において「所有関係」という概念で記述できるという意味である。例えば、詳細については後述するが、(1b) では彼の弁護士は短い手紙を所有していない可能性もあるが、彼は弁護士が手紙を読んでもくれることを、すなわち所有することを意図して書いているので、「所有関係」は成立すると考えられる。同様に、(1c) では彼は彼女が良い奥さんであることを享受しており、(1d) では彼女は彼からさよならのキスを受けて別れたことを意味しているので、彼女とさよなら (の挨拶) の間での「所有関係」は成り立つと考えられる。

Bolinger (1977) のいう形式と意味との関係を考察する際には、今一度しっかりと形式と意味を再定義する必要がある。本稿では、形式には構文 (型) と文という二つの解釈が対応するので、構文の意味とは動詞が挿入される以前の、すなわち構文型つまりタイプとしての意味を示し、文の意味とは構文に動詞が挿入された以降のトークンとしての (含意的意味を含む) 意味を指すと仮定して話を進める。本稿は、構文独自の意味的要素があるとしても、核となる動詞独自の特性が構文を含む文の意味を決定づける、と主張する。例えば、Bolinger の原理は、構文型の意味においては妥当であるかもしれないが、動詞が生起した構文型を含む文の実際の意味ということになると強すぎることを指摘する。ただし、Bolinger (1977: ix-x) 自身は文ではなく構文の持つ意味について言及していることから、² 本稿の主張は Bolinger の主張を補強することになると思われる。

本稿は、Pinker (1989, 2013²) などの語彙意味論の立場と Goldberg (1995, 2006) などの構文文法の立場は補完的な関係にあると主張するものである。ただし、Goldberg では構文を「形式と意味的あるいは談話的な機能との習得された組み合わせ (“learned pairings of form with semantic or discourse function”)」と定義し、形態素 (morpheme)、語 (word)、合成語 (complex word)、イディオムなども構文と見なしたり (Goldberg (2006: 5) 参照)、あるいは二重目的語構文は多義的 (polysemous) と考える (Goldberg (1995:37-39) 参照) など議論の余地があるので、構文文法の主張をそのまま受け入れるものではない。³

本稿の構成は次の通りである。まず、動詞と構文の関係について触れた後、二重目的構文を概観し、動詞 make と非言語的伝達動詞が生起する特殊な二重目的語構文について考察する。最後に本稿をまとめる。

2. 動詞と構文

まず、動詞の意味は生起する構文に大きく影響を受けるという事実に関して、There 構文を例として確認することから始めてみよう。Levin and Rappoport Hovav (1995: 152) に言及されている Kirsner (1973: 110) によると、(2a) の動詞 remain には「三人の男たちが部屋に故意に留まることを選んだ」という動作主的 (すなわち意図的) な読みがあるが、There 構文の (2b) の remain には動作主的な読みはないと述べている。従って、(2b) は「三人の男たちが部屋に残っていた」という意味しかない。ただし、(2a) にも (2b) に見られる非意図的な読みはあると思われる。

- (2) a. Three men remained in the room.
b. There remained three men in the room.

(Kirsner (1973: 110) cited in Levin and Rappoport Hovav (1995: 152))

また、影山 (1996: 39) も、(3) を挙げて副詞 reluctantly との共起可能性の観点から、同様の主張をしている。

- (3) a. The Queen stood in front of them reluctantly.
b. *There stood the Queen in front of them reluctantly. (影山 (1996: 39))

嫌々人前に立つという行為は意図的行為であるが、この読みは (3b) の There 構文には認められない。この観察から、動詞の意味は生起する構文と深い関係があり、構文の意味機能と整合性のある意味を強要 (coercion) されることがわかる。

さらに、There 構文は、談話に新情報を担うものを導入するという機能をもつことから、通常 (4) と (5) から明らかのように、存在・出現を表す動詞群とのみ共起する。ただし、(6) に見られるように非存在・非出現を新情報として提示するような場合には生起することが知られている。⁴

- (4) a. Suddenly there ran out of the bushes a grizzly bear.
b. Then there danced towards us a couple dressed like Napoleon and Josephine.
c. There walked into the courtroom two people I had thought were dead.
d. There swam towards me someone carrying a harpoon.
- (5) a. *There never stood in the corner of this room an old-fashioned rocking chair.
b. *There didn't appear a new fact in the meeting.
c. *There didn't emerge any new fact while we were working on the project.
- (6) a. For the first time since the beginning of the war, there didn't emerge any fighter squadrons from the airbases in the desert.
b. For some American feminists, it has long been a source of frustration and perplexity that in France, there has never emerged a woman's movement as vocal and vigorous as the one in America.
c. There had never ruled a king who was as miserly as King Midas. (高見・久野 (1999))

問題の特殊な二重目的構文について議論する前に、二重目的構文の要点を Huddleston and Pullum (2002) と

Wechsler (2015: 280-9) をもとに概観しておく。

3. 二重目的構文概観

Huddleston and Pullum (2002) は, (7) に見るように二重目的語構文と与格構文を 5 種類に分類し, (8) のように各構文型に属する動詞を挙げている。⁵

(7)		$O^i + O^d$		$O^d + \text{NON-CORE COMP}$			
	i	a.	I gave her the key.	b.	I gave the key to her. [O ⁱ or to]		
	ii	a.	*I explained her the problem.	b.	I explained the problem to her. [to only]		
	iii	a.	I bought her a hat.	b.	I bought a hat for her. [O ⁱ or for]		
	iv	a.	*I borrowed her the money	b.	I borrowed the money for her. [for only]		
	v	a.	I spared her the trouble.	b.	*I spared the trouble to/for her. [O ⁱ only]		
(8)	i	O ⁱ OR TO	award	bequeath	bring	cable	deny
			feed	give	hand	kick	leave ₁
			lend	offer	owe	pass	post
			promise	read	sell	send	show
			take	teach	tell	throw	write
	ii	TO ONLY	announce	confess	contribute	convey	declare
			deliver	donate	exhibit	explain	mention
			narrate	refer	return	reveal	say
			submit	transfer			
	iii	O ⁱ OR FOR	bake	build	buy	cook	design
			fetch	find	get	hire	leave ₂
			make	order	reach	rent	reserve
			save ₁	sing	spare ₁	write	
	iv	FOR ONLY	acquire	borrow	collect	compose	fabricate
			obtain	recover	retrieve	withdraw	
	v	O ⁱ ONLY	allow	begrudge	bet	charge	cost
			envy	excuse	fine	forgive	permit
			refuse	save ₂	spare ₂	strike	tax
			tip	wish			

Wechsler (2015: 280-9) が二重目的語構文と与格構文についての先行研究の課題を整理しているのので, 詳細についてはそこに委ねることにして, ここでは本稿の主題である形式と意味との問題についてのみ議論する。(9a) のような二重目的語構文 NP₀ V NP₁ NP₂ と (9b) のような与格構文 NP₀ V NP₂ to NP₁ 及び (10b) のような受益構文 NP₀ V NP₂ for NP₁ との交替についての先行研究を, Pinker (1989) の主張を拠り所に整理すると (11) のように述べるができる。

(9) a. Ann sold Beth the cat. (二重目的語構文)

b. Ann sold the car to Beth (与格構文)

(10) a. Ann baked Beth a cake.

b. Ann baked a cake for Beth. (受益構文)

(11) 二重目的語構文では NP₁ が NP₂ を所有することを含意するのに対して, 与格・受益構文にはその意味はなく, NP₂ が NP₁ への具体的あるいは抽象的な移動関係があると仮定する。

Pinker (1989) は, 二つの異なる意味的表示 (semantic representations) を提案し, ある語彙的規則 (lexical rule) によってお互いを関係付けている。

- (12) NP₀ CAUSE NP₁ to HAVE NP₂ ⇔ NP₀ CAUSE NP₂ to GO TO NP₁
 ↓ ↓
 NP₀ V NP₁ NP₂ ⇔ NP₀ V NP₂ to NP₁

(12) では、ある動詞の意味が NP₀ CAUSE NP₁ to HAVE NP₂ を示せば、NP₀ CAUSE NP₂ to GO TO NP₁ の意味も示し、逆も同様であることを示している。さらに、CAUSE の直後に来る変化を被る項を動詞の直後に来る目的語とする連結規則 (linking rule) を提唱している。ちなみに、Goldberg (1995) も記述の方法は異なるが問題の両構文に二種類の意味を結びつけている。

Pinker 自身も主張するように、(12) のような一般化では問題の交替現象を全て説明することはできず、個々の動詞の語彙的意味特性を考慮する必要がある。例えば (13)-(18) を見てみよう。

- (13) a. Ann donated the books to the library.
 b. *Ann donated the library the books.
 (14) a. Ann drove the car to Beth.
 b. *Ann drove Beth the car.
 (15) a. Ann showed the car to Beth.
 b. Ann showed Beth the car.
 (16) a. *The music gave a headache to Ann.
 b. The music gave Ann a headache.
 (17) a. Beth pulled the box to Ann. (lower, haul, drag, …)
 b. *Beth pulled Ann the box.
 (18) a. Ann shouted the news to Beth. (whisper, yell, …)
 b. *Ann shouted Beth the news. (Wechsler (2015))

(13b) が許されないのは、図書館は一見すると寄贈された書籍を所有することができそうに思えるが、いわゆる所有関係が成立するためには有生目的語でなくてはならないと説明できる。(14) においては、Beth の所まで運転しても Beth は車を所有することはないが、(15) においては Beth に車を見せれば Beth は車の情報を得る、すなわち所有することは可能である。同様に、(16a) の与格構文においては抽象名詞である音楽から頭痛が Ann の所へ移動することはない。問題は (17) と (18) の場合である。二重目的語構文では、pull のような力の連続的行使 (continuous imparting of force) を表現する動詞と shout のように発話の様態を示す動詞は認められない。

(17) と (18) についての説明を試みているものに Bresnan and Nikitina (2009) がある。Bresnan and Nikitina (2009) は文法的な判断は描写される出来事タイプがどれだけの蓋然性をもつかどうかによるものだと述べている。例えば、(17) に関しては、現代の北米での生活では、もしある所有物 (a possession) を持って握っていたり、くっついていたり、接触を保っていたりする場合は、所有の転移が起こるということはあるそうにないと考えており、(18) に関しては、(19) に示すように発話様態動詞が情報所有の転移を含んでいないことに起因すると主張している。⁶

- (19) He {whispered/yelled/mumbled/barked/muttered} (but he wasn't saying anything). (Bresnan and Nikitina (2009))

次に、(12) に示された両構文間の対応関係が、動詞 give の場合に見られないことについて考えておきたい。Rappaport Hovav and Levin (2008: 137) は (20a) のような例を挙げて、与格項は所格ゴール (locative goal) ではないので、where による疑問詞化は出来ないことを指摘している。

- (20) a. *Where did you give the ball?
 b. Where did you kick/throw the ball? To third base.
 c. Where did you send the bicycle? To Rome. (Rappaport Hovav and Levin (2008: 137))

確かに動詞 *give* の場合には、与格構文において所有スペースへの動きの意味はなく、彼は彼女から鍵を受け取って所有している意味しかない。

- (21) a. *She gave him the key, but he didn't have it.
b. *She gave the key to him, but he didn't have it.

この事実は、与格構文が直裁的に所有関係を意味するというのではなく、あくまで移動関係を表すが、動詞 *give* の語彙的特性から「与える」という意味がこの場合の物理的移動、すなわち彼女のところから彼の所への移動を前提とするので、与格構文に生起可能であると考えられる。つまり、動詞の意味が構文の意味に上書きされていると考えられるので、Wechsler (1991, 1995) と Rappaport Hovav and Levin (2008) が主張するほどには Pinker の主張の妥当性を危うくするものではないと思われる。文の(全体的)意味は構文(型)の意味に適した動詞の意味が融合することによって決定されると考えれば、説明がつくと思われる。ある場合には今見たように動詞の意味が強く働き、また別の場合には Frank sneezed the tissue off the table. のように、構文の意味が強く働いて他動詞用法を持たない動詞 *sneeze* が、他動詞の位置に生起することが許されることがある。

最後に、Huddleston and Pullum (2002) では (8i) として分類されているように、二重目的語構文としても to 前置詞与格構文にも生起する動詞 *write* を取り上げて議論しておきたい。

登田 (2007) は、(22) を挙げて『ジーニアス⁵』(s.v. *Write* 3b) が記述するような「彼は弁護士に短い手紙を書いて送った。」という意味は与格構文 *He wrote a note to his lawyer.* 及び二重目的語構文 *He wrote his lawyer a note.* ではなく、この「(書き)送る」の意味は取り消すことのできる意味、すなわち含意 (implicature) であると主張した。同様の主張を Rappaport Hovav and Levin (2008) も (23) を引用して行っている。

- (22) a. He wrote a note to his lawyer, but he didn't mail it.
b. He wrote his lawyer a note, but he didn't mail it. (登田 (2007))
(23) a. I wrote a letter to Blair, but I tore it up before I sent it.
b. I wrote Blair a letter, but I tore it up before I sent it. (Rappaport Hovav and Levin (2008: 147))

「書く」という動詞は直接目的語の創造を目的とする達成動詞 (verbs of accomplishment) (cf. Vendler (1967)) の1つであり、その遂行行為の意味自体からは「送る」という意味は含意されない。目的語にさらに目標 (goal) が伴った「...に手紙を書く」という二重目的語構文の構文の意味及び語用論的・常識の意味から「(手紙を)送る」という意味が加わるために、「(手紙を)受け取り所有する」ことを含意されることになる。つまり、確かに「手紙を書く」という行為から慣習的に「投函する」行為を容易に連想できるが、「調査結果を書く」という行為から「調査結果を(書いて)送る」という行為は連想し難いので、(24a, b) は容認されない。彼が私に調査結果を書いて送ってきたことを示すためには、(24c) のように前置詞 *with* が必要となる。二重目的語構文において *write* が「書いて送る」意味を含意するためには、動詞 *write* と目的語との間に結合的意味が関与するが、*write* の語彙の意味だけでは 'write and send' の意味はまだ成立していないことを示している。ただし、動詞 *send* の場合は意味特性からして「調査結果を送る」ことに関しては二重目的語構文も与格構文も問題なく容認される ((24d, e) 参照)。

- (24) a. ??He wrote me the results of his {investigation/examination}.
b. ??He wrote the results of his {investigation/examination} to me.
c. He wrote me with the results of his {investigation/examination}.
d. He sent me the results of his {investigation/examination}.
e. He sent the results of his {investigation/examination} to me. (Toda (2009))

主張の要点は、二重目的語構文と与格構文に生起する動詞 *write* には、両構文の特徴である所有関係と転送関係の意味が語彙の意味としてあるのではなく、語用論的な含意としてのみあるということである。換言すれば、本稿で問題とする二重目的語構文に見られる「所有関係」の意味は含意レベルまでも含めて考える必要があることを示唆していることになる。

本節を終える前に、Huddleston and Pullum (2002) が示している (7) と (8) のように、なぜ動詞によって生

起する構文型が異なるのか、特に (7) の (iia) *I explained her the problem., (iva) *I borrowed her the money, (vb) *I spared the trouble to/for her. が生起しないかについて少し考えておきたい。

与格構文のみ許す (iia) の動詞 explain および同じ動詞類の announce と say は、それらの意味、すなわち「説明する」、「宣言する」、「言う」からして目的語指示物である情報内容等を発信するという意味を表すが、被説明者が情報等を所有するという含意することはないと言える。同様に、与格構文のみ許す (iva) の動詞 borrow および同じ動詞類の acquire, collect は、その意味「借りる」、「獲得する」、「収集する」からして目的語指示物ではなく主語指示物が所有することを強く示している。

二重目的語構文のみ許す (vb) の動詞 spare および同じ動詞類の cost と fine は、その意味「取り除く」、「費用がかかる」、「罰金を科する」からして主語指示物から、例えば問題が彼女の方へ移動するという関係は成立しないと言える。ではなぜ二重目的語構文が許されるかといえば、彼女と問題との間に非所有、すなわち問題を抱えているという所有関係の状態から問題を排除するというマイナスの所有関係が成立し、「所有関係」という概念で関係づけることができると言えよう。現時点ではこの場合、NP₀ CAUSE NP₁ not to HAVE NP₂ のように所有関係を記述できるものと仮定しておく。この種の説明は、第2節で言及した There 構文における非存在・非出現を新情報として提示するような場合の説明と軌を一にする。

構文型と密接な関係を持つ動詞自体の意味について触れたところで、次節では本題である特殊な二重目的語構文に関して、特に創造動詞 make の場合と非言語伝達動詞 kiss と hug と wave の場合について統語構造と意味とのミスマッチの視点から考える。

4. 特殊な二重目的語構文

4.1 創造動詞 make の場合：統語構造と意味とのミスマッチ (1)

(25) (= (1c)) における a good wife の文法的機能について直接目的語と分析するか補語と分析するかで研究者間で意見が別れている。⁷

(25) She made him a good wife.

登田 (2016) は、Huddleston and Pullum (2002) の指摘する統語構造と意味とのミスマッチに加えて、him と a good wife の間に二重目的語構文の場合に見られる「所有関係」が存在することを根拠に (25) は二重目的語構文であり、問題となっている a good wife を目的語と分析した。結果的に、登田 (2016) は目的語説を取る Huddleston and Pullum (2002) と安藤 (2005) (さらには注7で引用している細江 (1999)) を擁護し、補語説を取る Quirk *et al.* (1985) と『ジーニアス⁵』の分析が不備であることを主張した。本稿では登田 (2016) の主張を (26) のように捉え直してしてさらに明示的に表示する。

(26) 統語構造と意味とのミスマッチ (1) :

make の場合：間接目的語となる NP₁ と統語的・意味的・語用論的に直接目的語であると同時に、主語の補語 (complement, C) として機能する述語名詞 (predicate noun) となる NP₂ が、二重目的語構文を構成し、両者間に所有関係が成り立つ。

	NP ₀	V _t	NP ₁	NP ₂	(基本形：NP ₀ V _t NP ₂)
		↓	↓		
syntax:			IO	DO	
semantics/pragmatics:			IO	DO	所有関係 <= 強要 (coercion)
	Subj ₀		C ₀	主述関係	

(26) が示していることは、間接目的語となる NP₁ と統語的・意味的・語用論的には直接目的語であると同時に主語の補語 (complement, C) として機能する述語名詞となる NP₂ が二重目的語構文を構成し、強要 (coercion) により両者間に所有関係が成り立つ、というものである。⁸

本稿では、Huddleston and Pullum (2002) の (25) に対する統語的分析の二つの根拠と (25) における him と

a good wife の間に「所有関係」が存在することの論拠を簡潔に指摘しておく。⁹ まず、決定的な最初の根拠は、a good wife が形容詞句や無冠詞名詞句に置き換えることができない点である ((27) 参照)。

- (27) a. *She made {exemplary/treasurer}.
 b. She made him {grateful/secretary}. (Huddleston and Pullum (2002: 256-7))

(27b) が容認される読みを持つ場合は、grateful と secretary が him の述語とする She made him a good husband. 型に属する場合であって、問題の (25) 型に属する場合ではないと説明されている。

Huddleston and Pullum (2002: 256-7) が主張する根拠の二番目は、補部構造 (complementation) が She made (him) a teddy-bear. 型と同様に、直接目的語が間接目的語に先行されるだけでなく、前置詞付き構文 (すなわち与格構文) との交替形をも持つということである ((28) 参照)。

- (28) a. She made a teddy-bear for him.
 b. She made a good wife for him. (Huddleston and Pullum (2002: 256-7))

次に、(25) における him と a good wife の間に「所有関係」が存在することの論拠を登田 (2016) から一点挙げておく。「所有関係」の存在を前提にすることで (29) の例における容認性の相違も説明できる。

- (29) a. She made her students a good elementary teacher.
 b. *She made her parents a good elementary teacher. (登田 (2016))

生徒と教師との所有関係を以下のように考えることができる。つまり、生徒に対して教師として良い教育活動を行ったということは全く自然で理に適った経験である。これに対して、自分の両親に対して教師として良い教育活動を行ったということは全く不自然であると言える。

ここでは、問題の構文 She made him a good wife. における a good wife は、意味的には確かに主語 she との補語関係はあるものの、統語的振る舞いと所有関係の存在という構文的特徴からして、動詞 make の目的語であると議論した。次節では非言語伝達動詞 kiss/hug/wave の場合の統語構造と意味とのミスマッチについて議論する。

4.2 非言語伝達動詞 kiss/hug/wave の場合：統語構造と意味とのミスマッチ (2)

本節では、(30) における下線部が示すような構文について考える (下線筆者)。

- (30) a. Kissing him good-bye earned you extra credit. (Mitch Albam, *Tuesdays with Morrie*, p.1.)
 b. "Come back and see your old professor," Morrie said when I hugged him good-bye. (Mitch Albam, *Tuesdays with Morrie*, p.38.)
 c. The nurses came out to wave Granddad goodbye. (LDCE⁶)

登田 (2006) は (30) の下線部の構文を非言語伝達動詞による二重目的語構文と分析した。本稿でもこの主張を踏襲して議論を進める。問題の構文に生起する動詞は、非言語伝達動詞 (non-verbal communication verbs) と呼ばれる動詞類に属すると思われる。Huddleston and Pullum (2002: 305) は、(31) にも示すように、非言語伝達動詞として grin, laugh, nod, sigh, smile, wave などを挙げ、She smiled her assent. を "She signaled her assent by smiling" とパラフレーズし、her assent は動詞 smile の項ではなく、受動文の主語にはなれないと述べている。

- (31) a. She smiled her assent.
 b. 'She signaled her assent by smiling.'
 (non-verbal communication verbs: grin, laugh., nod, sigh, smile, wave)
 c. *Her assent was smiled. (Huddleston and Pullum (2002: 305))

Huddleston and Pullum (2002: 301ff.) は、her assent のような名詞句を「伝達された反応の目的語 (object of

conveyed reaction)」と記述している。Levin (1993: 97-8) も同様に、この種の下位範疇化されない目的語を反応目的語 (reaction object) と呼び、この反応目的語構文は受動文になれないと述べている。¹⁰ 動詞 kiss と hug も特に西洋文化におけるキスやハグなどのジェスチャーによる挨拶行動の様相 (以下「ジェスチャー文化」と呼ぶ) からして動詞 wave と同様に非言語伝達動詞であると思われる。¹¹ 本稿では、登田 (2006) に従い反応目的語を構文の項 (constructional argument) あるいは見せかけの直接目的語 (fake direct object, fDO) と呼ぶことにする。では、(32) はどうなるであろうか。

- (32) a. John waved his hands {goodbye/thanks/yes/no}. (登田 (2008))
 b. He looked like a happy little boy when he waved his hand "good-bye."
 <<http://chaplaincyinstitute.org/library/spiritual-care-and-chaplaincy/finally-letting-go-a-blessing-at-the-end-of-life/>>
 c. Beverly waves her hand goodbye. <<https://www.youtube.com/watch?v=QpQidu3S9tw>>

(32) において、(30c) において編入されていた (incorporated) 動詞 wave の直接目的語 his hand が具現化している。この場合 his/her hand と goodbye の間に所有関係はないので、いわゆる二重目的語構文ではない。ここでは、暫定的に「見せかけの二重目的語構文 (fake double object construction, fDOC)」と呼んで区別しておくことにする。まず、本稿では登田 (2006) の議論を統語構造と意味とのミスマッチの視点から捉え直して (33) を提示する。

(33) 統語構造と意味とのミスマッチ (2):

- a. kiss/hug の場合: 統語的には直接目的語でかつ意味的・語用論的には間接目的語である NP_1 と、統語的には見せかけの直接目的語でかつ意味的・語用論的には直接目的語である NP_2 が、二重目的語構文を構成し、両者間に所有関係が成り立つ。

	NP_0	V_i	NP_1	NP_2	(基本形: NP_0 V_i NP_1)
			↓	↓	
syntax:			DO	fDO (構文の項)	←強要
semantics/pragmatics:			IO	DO	所有関係 ←強要

- b. wave の場合: 統語的・意味的・語用論的には間接目的語である NP_1 と、統語的には見せかけの直接目的語であり、かつ意味的・語用論的には直接目的語である NP_2 が、二重目的語構文を構成し、両者間に所有関係が成り立つ。

	NP_0	V_i	NP_1	NP_2	(基本形: NP_0 V_i [$INCOR-NP$ one's HAND] to NP_1)
			↓	↓	($INCOR-NP =$ incorporated noun phrase)
syntax:			IO	fDO (構文の項)	他動詞化 ←強要
semantics/pragmatics:			IO	DO	所有関係 ←強要

- c. 段階性/連続体: kiss > hug; wave > {nod/bow}
 ジェスチャー文化に関わる語用論的知識が関与

(33a, b) における要点は、動詞の直後の要素が統語的に直接目的語か間接目的語かという相違はあるものの、 NP_1 と NP_2 が二重目的語構文を構成し、両者間に所有関係が成り立つ、ということである。kiss と hug は目的語として人を取ることができるのに対して wave は取れない ((34a) 参照)。ただし、これらの動詞は全て自動詞用法を持ち、いわゆる反応目的語を取ることはできる ((34b) 参照)。

- (34) a. She {kissed/ hugged /*waved} granddad.
 b. She {kissed/hugged/waved} good-bye.

さらに興味深い事実を以下に指摘する。まず第一に, kiss/hug は通常与格構文には生起できないが((35b) (36b) 参照), wave は与格構文にも生起できる ((37b) 参照)。ただし, (36c) に示すように, hug でも与格構文に生起する場合もないわけではない。興味深いことに, kiss と wave は, hug と多少分布を異にし, 抽象的・比喩的意味において to 与格構文が成立する ((38) 参照)。

- (35) a. Kiss Daddy goodnight.
 b. *Kiss goodnight to Daddy.
- (36) a. I hugged him goodbye.
 b. *I hugged goodbye to him.
 c. Endill hugged goodbye to the Bookman and climbed down the shelves, hoping no-one had spotted him.
- (Stuart McDonald, *The Adventures of Endill Swift*. (1990) (BNC))
- (37) a. The nurses came out to wave Granddad goodbye.
 b. The nurses came out to wave goodbye to Granddad.
- (38) a. She {kissed/*hugged/(?)waved} her career good-bye.
 b. She {kissed/*hugged/(?)waved} good-bye to her career. ((35)-(38b) 登田 (2006))
 c. She knew if she concentrated on her marriage she could kiss her career goodbye. (LDCE⁶)
 d. If John loses his job, we can wave our house goodbye. (MEDALAE)
 e. If you're not careful, you can wave goodbye to any pay rise this year. (LDCE⁶)

第二に, 既述したように, Pinker (1989: 212) は, (39) のような give のイディオム表現の分布に関しては, 二重目的語構文は “cause to have” の概念を表すのに対して, to 与格構文は “cause to go to” の概念を表すと仮定すれば説明できると主張している。

- (39) a. Janice's behavior gave John an idea.
 b. *Janice's behavior gave an idea to John. (Pinker (1989: 212))

(39a) では, ジャニスの振る舞いによってジョンにある考えが浮かんだことを表している。これに対して, to 与格構文 (39b) は, コミュニケーションによってある考えが移動することを表すが, ジャニスの振る舞いは考えの起点 (すなわち考えの最初の所有者) にはならないので非文となる。

しかし, 問題の構文では無生物の目的語だけではなく主語も生起することができ, 特に to 与格構文 (40b) の文法性, 容認性は従来の方法では説明ができない。この種の無生物主語と目的語が来るような場合はイディオム化が進んでいることを示していると考えられる。

- (40) a. Janice's behavior {kissed/*hugged /waved} her career good-bye.
 b. Janice's behavior {kissed/*hugged /waved} good-bye to her career.

さらに, この種の構文において, 動詞 kiss と hug は, 動詞 give の場合と同様にキスやハグをすれば即刻, 例えば「さよならをした」こと, つまり所有関係の意味のみを持つように思われる。kiss/hug 動詞の場合, 人を直接目的語を取る場合が基本形であるが (cf. (35) (36)), 与格構文は無生物の主語や目的語が来る場合にのみ許され, 二重目的語構文と同様に所有関係が成立し, (41) に示すようにこの関係を取り消すことはできない。

- (41) a. *Janice ('s behavior) {kissed/waved} her career good-bye, but she didn't resign.
 b. *Janice ('s behavior) {kissed/waved} good-bye to her career, but she didn't resign.

最後に, (33c) について触れておく。既述したように, 他動詞用法では kiss が hug よりも問題の二重目的語構文 (と与格構文) に生起しやすい。自動詞用法では, (42) と (43) から明らかなように nod, bow が wave よりも問題の二重目的語構文に生起し難い。これらの動詞間における容認性の問題は, ジェスチャー文化に関わ

る語用論的知識が関与していると思われる。

- (42) a. They nodded goodnight to the security man. (<<https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english/nod>>)
 b. ???They nodded the security man goodnight.
- (43) a. He bowed good-bye to me.
 b. ???He bowed me good-bye. (登田 (2006: 179))

本節の議論を大雑把にまとめると (44) となる。

- (44) 創造動詞 *make* や非言語伝達動詞 *kiss* と *hug* と *wave* を含めた動詞が二重目的語構文に生起する場合は、二つの目的語指示物間においてなんらかの所有関係が成り立ち、そしてこの場合に限り二重目的語構文が成り立つ。ただし、「なんらかの所有関係」とは抽象的な意味において成立するものなので、「所有関係で捉えられる関係」と言い換えることができる。¹²

本節を終える前に、既述したように与格構文にも所有関係が成立するので、形式と意味との関係、つまり動詞の意味と構文(型)の意味と文の意味(文意)の関係について、主張を要約しておくことにする。動詞の意味が所有関係を示す動詞 *give* 型は、与格構文においても過去時制では「与えた」ことになるので、確かに与えられて所有関係が成り立つ。Rappaport Havav and Levin (2008) も同様の主張をしている。さらに既述したように、伝達動詞の *write* が二重目的語構文に生起する場合は当該の目的語指示物間に所有の意味どころか転送の意味も存在せず、所有関係および転送が成立するのは含意においてのみであった。

文という形式にある文意(この場合含意も含む)がある場合、またある文意がある形式によって表現される場合、その形式すべてに問題の文意を関係づけるか、もしくは形式にある程度の意味があることは認めておくとして、形式の要素、例えば動詞などの個々の語彙の意味に大きく委ねるか否かは意見の分かれるところである。前者の立場を取るのが Goldberg (1995, 2006) を代表とする構文文法の立場であり、後者の立場を取るのが Pinker (1998) などを代表とする語彙意味論の立場である。本稿は、両者を融合した立場を取る。Bolinger (1977) を引用するまでもなく、第1節でも見たように、*There* 構文独自の構文の意味は存在する。さらに、Goodman and Sethuraman (2006: 266) と Goldberg (2006: 116) が引用している Ahrens (1995) の実験結果では、*She mooped him something.* に見られる存在しない人工動詞 *moop* の意味を問われた大人の母語話者の60%が、*'give'* の意味であると回答している。この事実は、母語話者に二重目的語構文という構文(型)が所有の意味を表すことが心的に内在していることを示していることに他ならない。

しかし、構文が文意を決定するのであれば、動詞 *write* が二重目的語構文に生起する場合における所有関係と転送の文意は含意であるがゆえに取り消されるという事実からも明らかなように、動詞それ自体の意味の存在を無視できるものではない。動詞 *give* の場合は、与格構文においても転送ではなく所有を示す事実も同様に、文意の決定には構文の意味だけではなく動詞の意味も深く関わっていることを示している。このような理由で、本稿は語彙意味論あるいは構文文法の立場のどちらか一方の立場を取るというのではなく、文意の決定には両者の立場を融合させる必要があることを示すものである。

5. おわりに

本稿では、特に二重目的語構文を取り上げ、構文・文には含意的意味も含め所有関係という意味関係が存在することと、実際の文の意味の決定には、動詞の意味が構文型と連動して決定的な役割を果たすことを見てきた。Bolinger (1977) の形式と意味との一対一の対応という原理は、構文型とその含意的意味を含めた意味との関係においては妥当かもしれないが、動詞が生起する文とその意味の関係においては強すぎると思われる。なぜなら、(i) *give* 動詞類の場合のように構文型が異なるにもかかわらず所有の意味を同じように示す場合があるということ、(ii) 動詞 *write* では含意的意味を認めなければ所有関係どころか転送関係の意味も表さない場合があるということ、(iii) 統語構造と意味とのミスマッチが創造動詞 *make* と *kiss* や *wave* 等のような非言語伝達動詞類の場合に存在するものの、異なる構造を二つの目的語指示物間において所有の意味関係が成り立つという点で、

統一的に記述できるということからである。構文型に抽象的な意味を付与し、具体的な文の意味は個々の動詞の特異な語彙的特性が反映すると仮定すれば、構文型とその意味の関係においては Bolinger (1977) の原理は保持できると思われる。

さらに、本稿では、文意を正確に記述するには語彙意味論と構文文法の両者の視点を融合させる必要があることを示した。

注

* 本稿は、熊本言語学研究会（平成 29 年 4 月 8 日）と名古屋大学英文学会（平成 29 年 4 月 15 日）における其々の口頭発表と講演「英語学の研究と教育—動詞の意味と文・構文の意味の関係を見つめて—」の中の二重目的語構文に関する箇所に加筆・修正を施したものである。口頭発表と講演は、Bolinger (1977) の主張である形式と意味との一対一の対応という原理の視点から、登田 (2006, 2007, 2008, 2016) と Toda (2009, 2010) の研究を捉え直したものである。口頭発表後に二重目的語構文の所有関係を統語構造に反映して説明を試みている Harley and Jung (2015) を読むことができたが、本稿は統語的分析については議論しない。

松瀬憲司氏（熊本大学）と市川雅己氏（熊本大学）には研究会で、加藤正治氏（大阪大学）には学会の折に、阿部幸一氏（愛知工業大学）には草稿の段階でコメントをいただいた。ここに記して感謝したい。

¹ Bolinger (1977: x) は、形式と意味との一対一の対応関係を再確認することが目的であると、以下のように述べている：“It [=Bolinger (1977)] reaffirms the old principle that the natural condition of a language is to preserve one form for one meaning, and one meaning for one form.”

² (i) のような Bolinger (1977: ix-x) の主張から、文という概念ではなく構文という概念が念頭にあることは、窺われる：

(i) This book [=Bolinger (1977)] is a challenge to the fallacy of meaninglessness. It attempts to prove, by case studies, that any word which a language permits to survive must make its semantic contribution; and that the same holds for any construction that is physically distinct from any other construction. (下線筆者)。

ちなみに、Bolinger (1977) は二重目的語構文についての事例研究は行っていないことを指摘しておきたい。

³ Goldberg (1995: 37-39) は、二重目的語構文は多義的 (polysemous) であると指し、六つの異なる意義 (senses) を列挙している：

- (i) a. 中心的意義：動作主は受け手に受動者を成功裏に受理させる。(give, pass, hand, serve, feed, throw, toss, slap, kick, poke, fling, shoot, bring, take, …)
- b. 条件が満足されれば、動作主は受け手に受動者を受理させることを含意 (imply) する。(guarantee, promise, owe, …)
- c. 動作主が受け手がある未来時に受動者を受け取らないようにする。(refuse, deny)
- d. 動作主が受け手がある未来時に受動者を受け取る行為をする。(leave, bequeath, allocate, reserve, grant)
- e. 動作主が受け手が受動者を受け取れるようにする。(permit, allow)
- f. 動作主が受け手が受動者を受け取ることを意図する。(bake, make, build, cook, sew, knit, get, grab, win, earn, …)
- (Goldberg (1995: 38))

⁴ Birner and Ward (1993) は、be 動詞が生起する存在 There 文 (existential *there* sentences) の意味上の主語は聞き手にとっての新情報であるのに対して、存在・出現を表す動詞が生起する提示 There 文 (presentational *there* sentences) の場合は談話上の新情報が生起すると明確に区別している。高見・久野 (1999) は There 構文に課される機能的制約として、「There 構文は、意味上の主語が導入される時点で、先行動詞がそれ自身で、あるいは場所句を伴って、存在か出現を表わす場合にのみ、適格となる。」と主張している。詳細については、Birner and Ward (1993) と高見・久野 (1999) 参照。

⁵ 多義的用法を持つ動詞 leave, save, spare, write の各クラスにおける用例を下記に挙げておく。詳細は Huddleston and Pullum (2002) 参照。

- (i) a. He left₁ everything to his wife. ('bequeezed') Class [i]
- b. I've left₂ some spaghetti for you. [iii]
- (ii) a. I'll save₁ you some porridge ('keep')/I can't spare₂ you any more. ('let you have') [iii]
- b. This will save₂/spare₂ you the bother. [v]

- (iii) a. I'll save some porridge for you./I can't spare any more for you.
 b. *This will save/spare the bother for you. (Huddleston and Pullum (2002: 309))
- (iv) a. He wrote her a letter. [i]
 b. He wrote her a cheque. [iii] (Huddleston and Pullum (2002: 311))

⁶ Bresnan and Nikitin (2009) は、文法性の判断はデータにおける偏りを反映し、意味の文法表示における構造的相違を反映するものではない、と主張しているが、本稿ではこの立場の妥当性については議論しない。

ちなみに、Pinker では排除される例外となる用例を Bresnan and Nikitin (2009) から挙げておく。

- (i) a. He pulled himself a steaming piece of the pie.
 b. You just mumble him an answer. (Bresnan and Nikitin (2009: 165-6))

⁷ 細江 (1999) は動詞 make の生起する構文として (i) を挙げている (下線筆者)。

- (i) a. Crawling on all-fours, I made steadily but slowly towards them.—Stevenson.
 b. American men make the best husbands.—Hemingway.
 c. Gilcris made no response whatever.—Hall Caine.
 d. No foreigner can make an American girl a good husband.—Hemingway.
 e. I have made her a bow-pot.—Thackeray.
 f. I will make her my wife.—Watts-Dunton. (細江 (1999: 38-9))

登田 (2016) の脱稿後に、細江 (1999) の底本ともいうべき『精鋭英文法汎論』(1949) の用例及び解説と照合することができた。(ia, c) 以外は例文が異なっている。本稿が問題とする (25) と同型の (id) には She will make him a very proper wife.—Austen, Vanity Fair, 1. の用例があり、日本語訳は「彼女はあの人に取って本当にふさわしい妻となるでしょう」となっている。さらに興味深いことには、脚注 (2) (p.52) が付してあり、「例 (4) [(=id)], (5) [(=ie)]」の両文は何れも第四形式に属する。然も、その動詞の表す意味に差異の存することが認められるであろう。則ち、(4) においては、それは (2) [(=ib)] のものに近く、(5) に於いては、それは (3) [(=ic)] のものに近い。」と記載されている。つまり、細江は、問題の (id) は二重目的語構文と見なしていることになる。

⁸ 強要 (coercion) についての詳細な議論については、Boas (2011), Goldberg (1995, 2006), González-García (2011), Jackendoff (1997), Kövecses and Radden (1998), Lauwers and Willems (2011), Levinson (2000), Michaelis (2004), Pustejovsky (2011), Traugott (2007), Traugott and Trousdale (2013), Van Trijp (2015), Ziegeler (2007) 等参照。

⁹ Huddleston and Pullum (2002) はさらに微細な根拠をあげているが、本稿ではこれ以上立ち入らない。詳細については、Huddleston and Pullum (2002: fn. 35, 257) と登田 (2016) 参照。

¹⁰ OED² は、動詞 kiss について “trans. with cognate obj.; also, to express by kissing” と興味深い記述をし、(ib-d) のような例文を挙げている。

- (i) a. kiss: trans. with cognate obj.; also, to express by kissing
 b. We will kiss sweet kisses, and speak sweet words. (?1830 T_{ENNYSON} *Sea-Fairies* 34)
 c. He pluck'd her dagger forth...Kissing his vows upon it like a knight. (1864 T_{ENNYSON} *Aylmer's Field* 472)
 d. Coming to kiss good-night? (1883 E. P. R_{OEN} *Harper's Mag.* Dec.51/2) (OED²)

問題の二重目的語構文は、以下の Jespersen (1909-49, III, § 14.9.) の用例 (ii) から判断すると、19世紀後半頃には存在していたことが窺える。Jespersen は、問題の構文に現れる二つの名詞句を二つの直接目的語 (two direct object) と呼び、Curme (1931: 119-120) は二重対格 (double accusative) と呼んでいる。

- (ii) a. I think I must kiss you good-bye (Hankin 2. 167)
 b. he stooped to kiss her a farewell (Hardy L 7)
 c. (he should) have kissed her a welcome to the sweet twenties (Mackenzie C 196)
 (Jespersen (1909-49, III, § 14.9.))

目的語の受動化の例として Jespersen (1909-49, III, § 15.5) は (iii) を挙げている。

- (iii) a. He was kissed good-night.
 b. *Good-night was kissed him. (Jespersen (1909-49, III, § 15.5))

The book was given John. のような直接目的語の受動化は、イギリス英語では普通に容認され、アメリカ英語においても特に間接目的語が代名詞の場合には、容認可能とする話者が多いと言われている（影山 (2001: 143) 参照）。筆者のアメリカ人のインフォーマントは、hug と kiss と wave の総ての動詞において受動文は容認できないと判断した。

- (iv) *Good-bye was {hugged / kissed / waved} him. (登田 (2006: fn.7, 181))

問題の直接目的語は、いわゆる結果の目的語 (resultant object) とは受動化において容認されない点で異なる振る舞いを示す ((v)-(viii) 参照)。

- (v) a. She nodded her agreement.
 b. Corbett nodded his acceptance.
 (vi) a. *Her agreement was nodded (by her).
 b. *His acceptance was nodded (by Corbett).
 (vii) a. Baird invented television.
 b. John has painted a new picture.
 c. I baked a cake.
 (viii) a. Television was invented by Baird.
 b. The new picture has been painted by John.
 c. The cake was baked by me. (Quirk *et al.* (1985:750))

ただし、(ix) に示すように別の目的語の受動化可能性は動詞の種類により異なり、kiss/wave の場合は受動化の容認性が高い。

- (ix) a. He was {kissed/(?)waved/(*)hugged} good-bye.
 b. Her carrier was {(?)kissed/(?)waved/*hugged} good-bye. (登田 (2006: 184))

¹¹ ちなみに、お辞儀をするという行為は、日本文化においては一般的なジェスチャーによる挨拶行動であるが、西洋文化では一般的ではない。従って、動詞 bow は動詞 kiss と hug に比べて非言語的伝達動詞としての資格が低いと思われる。例えば、後述するように、さよならの挨拶行為をどのようなジェスチャーによって示すかは、文化によってある程度の結びつきがあるために、同じ西洋文化の英米においても動詞 bow と nod は動詞 wave に比べて問題の二重目的語構文に生じし難い ((42) と (43) 参照)。

¹² 第3節で述べたように、動詞 spare と cost の場合のような「非所有関係」も含まれることに注意。本稿の立場は、Goldberg (1995: 37-39) のように二重目的語構文に六つの異なる意義 (senses) を示し多義性を認め多くの二重目的語構文の種類を仮定するものではなく、二重目的語構文という型にある種の抽象的な「所有関係」を措定し、生起する動詞の語彙的特性によって Goldberg (1995) のいう多義性が生じると仮定する。

参考文献

- Ahrens, Kathleen. V. (1995) *The Mental Representation of Verbs*. Doctoral dissertation, University of California.
 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』開拓社、東京。
 Birner, Betty J. and Gregory Ward (1993) "There-Sentences and Inversion as Distinct Constructions: A Functional Account," *Berkeley Linguistics Society* 19, 27-39.
 Boas, Hans C. (2011) "Coercion and Leaking Argument Structures in Construction Grammar," *Linguistics* 49, 1271-1303.
 Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, Longman, London.
 Bresnan, Joan, Anna Cueni, Tatiana Nikitina, and R. Harald Baayen (2007) "Predicting the Dative Alternation," *Cognitive Foundations*

- of *Interpretation*, ed. by G. Bouma, I. Kraemer and J. Zwarts, 69-94, Royal Netherlands Academy of Science, Amsterdam.
- Bresnan, Joan and Tatiana Nikitina (2009) "The Gradience of the Dative Alternation," *Reality Exploration and Discovery: Pattern Interaction in Language and Life*, ed. by Linda Uyechi and Lian Hee Wee, 161-84, CSNI, Stanford, California.
- Croft, William (2013) *Verbs: Aspect and Causal Structure*, Oxford University Press, Oxford.
- Culicover, Peter and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press, Oxford.
- Curme, George O. (1931) *Syntax: A Grammar of the English Language*, 3 vols., Heath. Boston. [Rpt, Maruzen, Tokyo 1959.]
- Delacroix, Laurence (2014⁶) *Longman Dictionary of Contemporary English*, Pearson, London. (LDCE⁶)
- Deuter, Margaret (2015⁹) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Oxford University Press, Oxford. (OALD⁹)
- Ford, Marilyn and Joan Bresnan (2012) "'They whispered me the answer' in Australia and the US: A Comparative Experimental Study," *From Quirky Case to Representing Space: Papers in Honor of Annie Zaenen*, ed. by Tracy H. King and Valeria de Paiva, 95-107, CSLI Publications, Stanford.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago University Press, Chicago.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press, Oxford.
- Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff (2004) "The English Resultative as a Family of Constructions," *Language* 80, 532-568.
- González-García, Francisco (2011) "Metaphor and Metonymy do *not* Render Coercion Superfluous: Evidence from the Subjective-Transitive Construction," *Linguistics* 49, 1305-1358.
- Goodman, Judith C. and Nitya Sethuraman. (2006) "Interactions in the Development of Constructions and the Acquisition of Word Meanings," *Constructions in Acquisition*, ed. by Eve V. Clark and Barbara F. Kelly, 263-281, CSLI Publications, Stanford, CA.
- Green, Georgia M. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*, Indiana University Press, Bloomington.
- Grice, H. Paul (1967) "Logic and Conversation," William James Lectures, Ms., Harvard University. [Reprinted in *Syntax and Semantics: vol. 3: Speech Acts*, ed. by Cole, Peter and Jerry L. Morgan, 1975, 41-58, Academic Press, New York.]
- Harley, Heidi and Hyun Kyoung Jung (2015) "In Support of the P_{HAVE} Analysis of the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 46, 703-370.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (1993, 2003) *Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 細江逸記 (1949) 『精鋭英文法汎論 第1巻』泰文堂, 東京.
- 細江逸記 (1999) 『英文法汎論』(改訂新版) 篠崎書林, 東京.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (2002) *Foundations of Language: Brain, meaning, Grammar, Evolution*, Oxford University Press, Oxford.
- Jespersen, Otto. (1909-49) *A Modern English Grammar on Historical Principles I-VII*, Munsgaard, Copenhagen.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版, 東京.
- 影山太郎 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館, 東京.
- 岸本秀樹 (2001) 「二重目的語構文」『動詞の意味と構文』影山太郎 (編), 127-153, 大修館, 東京.
- Kirsner, R. S. (1973) "Natural Focus and Agentive Interpretation: On the Semantics of Dutch Expletive *er*," *Stanford Occasional Papers in Linguistics* 3, 101-14.
- 小西友七 (1996) 『英語のしくみがわかる 基本動詞 24』研究社, 東京.
- Kövecses, Zoltán and Günter Radden (1998) "Metonymy: Developing a Cognitive Linguistic View," *Cognitive Linguistics* 9, 37-77.
- Krifka, Manfred (1999) "Manner in Dative Alternation," *WCCFL* 18, 260-271, Cascadia Press, Somerville, MA.
- Krifka, Manfred (2004) "Semantic and Pragmatic Conditions for the Dative Alternation," *Korean Journal of English Language and Linguistics* 4, 1-32.
- Lauwers, Peter and Dominique Willems (2011) "Coercion: Definition and Challenges, Current Approaches, and New Trends," *Linguistics* 49, 1219-1235.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-lexical Semantic Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Levinson, Stephen (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*, MIT Press, Cambridge,

MA.

- McFadden, Thomas (2002) "The Rise of the *To*-dative in Middle English," *Syntactic Effects of Morphological Change*, ed. by David Lightfoot, 107–123, Oxford University Press, Oxford.
- Michaelis, Laura A. (2004) "Type Shifting in Construction Grammar: An Integrated Approach to Aspectual Coercion," *Cognitive Linguistics* 15, 1-67.
- Milsark, Gary (1974) *Existential Sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT.
- 南出康世 (編) (2014⁵) 『ジーニアス英和辞典』(第5版)大修館, 東京. (『ジーニアス⁵』)
- Pinker, Steven (1989, 2013²) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, MIT Press, MA.
- Pinker, Steven (2007) *The Stuff of Thought: Language as a Window into Human Nature*, Viking, New York.
- Pinker, Steven (2013) "The Acquisition of Argument Structure," *Language, Cognition, and Human Nature: Selected Articles*, ed. by Steven Pinker, 160-179, Oxford University Press, Oxford.
- Pustejovsky, James (2011) "Coercion to a General Theory of Argument Selection," *Linguistics* 49, 1401-1431.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2008) "The English Dative Alternation: The Case for Verb Sensitivity," *Journal of Linguistics* 44, 129-167.
- Rundell, Michael (2002) *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners of American English*, Macmillan, Oxford. (MEDALAE)
- Simpson, John (2009²) *The Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM Version 4.0*, Oxford University Press, Oxford. (OED²)
- Stevenson, Angus and Maurice Waite (2011) *Concise Oxford English Dictionary*, Oxford University Press, Oxford. (COD¹²)
- 高見健一・久野 暉 (1999) 「There 構文と非対格性 (1), (2), (3)」『英語青年』10月号, 17-23; 11月号, 18-25; 12月号, 29-32.
- Takami, Ken-ichi (2003) "A Semantic Constraint on the Benefactive Double Object Construction," *English Linguistics* 20, 197-224.
- 竹林 滋 (編) (20026) 『新英和大辞典』(第六版) 研究社, 東京.
- Thompson, Della (1995⁹) *The Concise Oxford Dictionary of Current English*, Clarendon, Oxford. (COD⁹)
- 登田龍彦 (2006) 「I hugged him good-bye について: 非言語的伝達動詞と二重目的語構文」『ことばの絆』(藤原保明博士還暦記念論文集), 卯城祐司他 (編), 175-188, 開拓社, 東京.
- 登田龍彦 (2007) 「多義性と意味変化における構文の役割について」『熊本大学教育学部紀要, 人文科学』第56号, 219-228.
- 登田龍彦 (2008) 「動詞 hand, write, wave における与格交替—使役移動と使役所有一」『熊本大学教育学部紀要, 人文科学』第57号, 49-57.
- Toda, Tatsuhiko (2009) "On the Role of Constructions in Semantic Change and Polysemy," *Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University*, ed. by Mutsumu Takikawa, Masae Kawatsu and Tomoyuki Tanaka, 493-506, Otowa-Shobo Tsurumi-Shoten, Tokyo.
- Toda, Tatsuhiko (2010) "Implicature and Meaning Change," *Synchronic and Diachronic Approaches to the Study of language: A Collection of Papers Dedicated to the Memory of Professor Masachiyo Amano*, ed. by Hirozo Nakano, Masayuki Ohkado, Tomoyuki Tanaka, Tomohiro Yanagi and Azusa Yokogoshi, 385-398, Eichosha Phoenix, Tokyo.
- 登田龍彦 (2016) 「She made him a good wife について: 統語構造と意味のミスマッチ」『熊本大学教育学部紀要』第65号, 55-64.
- Traugott, Elizabeth C. (2007) "The Concepts of Constructional Mismatch and Type-shifting from the Perspective of Grammaticalization," *Cognitive Linguistics* 18, 523-557.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press, Oxford.
- Van Trijp, Remi (2015) "Cognitive vs. Generative Construction Grammar: The Case of Coercion and Argument Structure," *Cognitive Linguistics* 26, 613-632.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca, New York.
- Wechsler, Stephen (1991) *Argument Structure and Linking*, Doctoral dissertation, Stanford University.

Wechsler, Stephen (1995) *The Semantic Basis of Argument Structure*, CSLI, Stanford, California.

Wechsler, Stephen (2015) *Word Meaning and Syntax*, Oxford University Press, Oxford.

Wierzbicka, Anna (1988) *The Semantics of Grammar*, Benjamins, Amsterdam.

安井 稔 (1988) 『英語学と英語教育』 開拓社, 東京.

Ziegeler, Debra (2007) "A Word of Caution on Coercion," *Journal of Pragmatics* 39, 900-1028.

Courpus

BNC. British National Corpus Online. <<http://www.natcorp.ox.ac.uk/>>